

# 北海道方言研究会会報

第 88 号  
(2011・12・20)

## 目 次

### 第190回例会研究発表資料 (2010.11.14)

1. 北海道釧路市における言語変化－「釧路言語調査」の結果から－  
朝日祥之・尾崎喜光 1
2. 北海道における動物と植物の方言 (4)－鳥と花 (その4)－  
道場 優 17

### 第191回例会研究発表資料 (2011. 2.13)

1. 逆使役構文は常に再帰構文として分析できるか  
北海道方言のデータによる検証 佐々木 冠 24
2. アイヌ語の使役と逆使役概観－日本語との対照から－  
奥田 統己 34

### 第192回例会研究発表資料 (2011. 4.17)

1. 札幌方言名詞アクセントの実時間研究  
～山鼻地区パネル調査 第一次報告～ 高野 照司 40

### 第193回例会研究発表資料 (2011. 6.12)

1. 北海道の「た」による敬意表現とドイツ語接続法  
－特に「よろしかったでしょうか」をめぐる－  
佐藤 和枝 59
2. 泉の神に仕える女性の伝説・「万葉集」より  
武沢 和義 69

### 第194回例会研究発表資料 (2011. 9.18)

1. 東日本の方言における格配列の多様性 佐々木 冠 75
2. 北海道における (約) 27年間の言語変化 (文法項目について)  
－国立国語研究所のパネル調査から－ 佐藤 亮一 83

平成23年度・総会報告 92

北海道方言研究会会則 表紙裏

発行 北海道方言研究会

## 札幌方言名詞アクセントの実時間研究

### ～山鼻地区パネル調査 第一次報告～<sup>1</sup>

北星学園大学 高野照司

#### 1. はじめに

本発表では、筆者が 2010 年秋より着手している札幌方言実時間調査の概要を説明し、現在までにまとまっている成果の一部を「第一次報告」として発表する。

「共通語化」を主な射程とした札幌方言のバリエーションや変化に関する大規模で組織的な検証は、札幌市山鼻地区で行われた小野(1991, 1993 [調査実施は 1990 年])を最後に今日まで途絶えてしまっている。それまでいくつもの先行研究により指摘された札幌(および北海道各地)における共通語化の急速な進展は、それからほぼ四半世紀の時を経た今、どのような様相を呈しているのだろうか。

従来の(とりわけ海外での)言語変化研究の主流は、現時点で観察される世代差を過去から現在にかけて生じた変化の投影と見なす「見かけ上の時間」解釈に基づいている(Chambers & Trudgill 1998)。しかし、この解釈のみに立脚する研究アプローチの大きな弱点は、その世代間較差が単に各年齢層に特有の言語特徴(例えば、若者の流行りことば)を反映する「年齢傾斜」であるのか、あるいは、比較的若い世代の言語特徴が将来も生き残り、その地域社会全体に拡散するであろう「言語変化」と言えるのかを見極める術を持たないことである。時間と手間はかかるものの、言語変化を捉えるためのより信頼性の高いアプローチは、一定の時を経た後、同一地域社会を再度調査する実時間(経年的)研究であることは言うまでもない。また、実時間研究は、言語変化研究の中心的課題である変化原因(なぜ変化が起こったのか)やその背景となる話者意識の問題、変化の中心勢力の分布や変化速度など「変化プロセス」(どのよ

<sup>1</sup> 本研究の実施にあたり、小野米一先生からは多くのご助言とご指導を頂いた。この場をお借りし感謝を申し上げたい。また、被験者として本調査にご協力をいただいた山鼻住民の方々にも感謝の意を表したい。本研究は、文部科学省科学研究費・挑戦的萌芽研究(No.21652040)『急速なグローバリゼーションによる地域方言の変容と話者心理に関する社会言語学的研究』(代表者・高野照司)、および国立国語研究所共同研究プロジェクト『接触方言学による「言語変容類型論」の構築』(代表者・朝日祥之)からの研究助成を受け行われている。

うに変化したのか)などへの洞察に極めて有益な情報を与えてくれる(ロング他 2001)。

本研究は、先行研究が示した札幌方言の「変化予測」(共通語化)に関して経年的に追跡調査を行い、変化予測を実時間により検証を試みることを主な目的とする。このような試みは、より高度な説明能力を持つ理論の構築に向け幾ばくかの貢献ができるという点において学術的にも重要な意義を持つと考えられる。

## 2. 個人差の社会的意味

北海道各地で共通語化の進展がおしなべて確認される一方で、共通語化への参与における「個人差」や地域の「内部差」は、北海道で方言調査が行われた比較的初期の段階から指摘されてきたことである(池上他 1977 など)。北海道における言語形成は、移住形態の地域間較差(一地域からの均質的集団移住か、複数地域からの混在的移住か)から内部差が大きい。また、入植者方言から徐々に脱皮し独自の北海道方言を作り上げてきた3世や4世においては、地域社会との結びつきや日常生活におけるコミュニケーション形態など、同じ方言地域内であっても話者により社会生活の実態が異なり、それと関連して共通語化においても顕著な個人差が認められる(小野 1981)。

本研究では、集団語主体の従来のアプローチから少し視点を変え、共通語化の渦中に身を置く地域住民(話者)の「個人語」の経年的変容を調査の力点とする。また、その社会的背景として、各住民の生活経験や地域社会との関与の仕方、他方言との接触やコミュニケーション形態など社会生活面での経年的変化、そして、方言意識や標準語意識などの言語イデオロギーなどを質的に捉え、個人語の変容との関連性について考察を深めたい。

具体的には、1990年の暮れに札幌市山鼻地区で行われた先行研究(小野 1991, 1993)の調査協力者(札幌方言生え抜き話者)から、当時と同一の調査票を用いた文章読み上げタスクによる音声資料を収集し、20年間で各話者の個人語がどのように変容した(あるいは、しなかった)のかを見極めるパネル調査を行う。

## 3. 個人語は生涯不変か

そもそも言語変化の「見かけ上の時間」的解釈は、「個人語は一生涯不変」、即ち、各世代の構成員一人一人の言語は言語形成期(おおよそ15歳くらいまで)以降、時を経ても変化しない安定した体系であるという大前提に依拠している(Chambers 2009)。しかし、近年の海外の研究動向を見ると、実時間研究の重要性を再認識し、「個人語不変」の前提を敢えて検証する研究が増えてきている。その結果、個人語は人生経験や社会変動を経て変化するという「生涯変化」の可能性を指摘する研究が少なからず

ある (Kerswill & Williams 2000; Sankoff & Blondeau 2007 など)。

一方、個人語の不変性を言語領域によって異なるものとみなし、限定的に捉える立場もある。一般に、個人語の語彙については、職業を中心とした様々な生活体験を通して変わりやすいが、音声面は変わりにくいとされ、特に本研究の調査対象である名詞アクセントのような韻律的側面は、分節音に比べ生涯変化しにくいことが指摘されている (Chambers 2009)。

日本国内に目を向けると、国研の鶴岡調査を初め、早くから実時間研究が盛んであったことは周知の事実である。北海道方言を例にとると、27 年の時を経て富良野市で行われた実時間パネル調査 (国研 1965 [1959 年調査実施], 国研 1997 [1986 年調査実施]) があるが、確かに言語領域ごとに特徴的な生涯変化の実態が見て取れる。

例えば、語彙項目においては、「安定型」の項目 (シバレル、ハク) は全く変化を示さない一方、「微減型」 (トーキビ、カッチャク、ユルクナイ) や「急激衰退型」 (ゴシヨイモ、カテル) と言える項目などがあり、共通語化へ向けた生涯変化は語彙種により異なる進捗を示す。

分節音については、1965 年の初回調査時点ですでに高い割合で共通語化が進んでいたため比較しにくい、ほとんどの項目 ([i] [e] の区別など) で微増が見られる一方、ガ行子音の鼻音化 (「釘」「中学」「道具」など) については、どの年齢層でも初回調査と再調査間で大きな食い違いは見られなく、25 年の時を経てもほとんど変わっていないという意外な側面も見られる。

一般に最も変わりにくいと言われる韻律面においては、予備調査であるため分析対象語彙数は少ないものの、「主人」 (シュジン、共通語型は「シュ'ジン」)、「火箸」 (ヒバシ、共通語型は「ヒ'バシ」) 、窓 (マド、共通語型はマ'ド) などの名詞アクセントは、どれも話者の加齢とともに共通語型への変化を起こしているとされ、「個人語は不変」とする一般化とは相反する結果が出ている。

経年的パネル調査に基づく検証が不可欠となる「生涯変化」の研究は全般的に不足しており、上記の研究成果も含めて、分析結果は地域社会 (例えば、日本国内対海外) や言語領域ごとにまちまちで一貫性を欠く部分が少なくない。今後は、より多くの地域社会で様々な領域 (語彙・文法・音声面) にわたる検証が必要とされる。

#### 4. 本発表 (第一次報告) の概要

本発表では、札幌市山鼻地区における札幌方言音声の共通語化調査 (小野 1991, 1993) を先行研究として、経年的パネル調査による研究成果の一部を解説する。



#### 4.1 調査地：札幌市中央区山鼻地区 20 年前と今

北海道では 1871 年、開拓史による本格的都市作りが開始された。1876 年 山鼻村に屯田兵が入植し、札幌最古の屯田兵村が山鼻に誕生。1910 年札幌村、苗穂村、上白石村、豊平村、山鼻村の各一部が、札幌区に編入され、このうち苗穂村の一部と山鼻村の全域は、現在の中央区に含まれることになった。

現在でも屯田兵にまつわる歴史は受け継がれ、「屯田兵資料館」、「屯田兵子孫の会」なども存続している。また、札幌の生え抜きが多く、町内会組織が比較的しっかりしている。かつては北海道教育大学がこの地区にあり、札幌南高（旧制第一中学校）、名門中学などのある「文教地域」として落ち着いたある住宅街を成しており、少なくとも 1990 年当時は、札幌市内で最も「札幌らしい」ところとされた。

今日の山鼻の街並みは大きく変わり、マンションが乱立。昔ながらの商店街も衰退した。そのような地域変化の反映として、山鼻の生え抜き住民からは、今回の調査を通して以下のような声がしばしば聞かれた。

- 街の様変わり

「子供がいなくなった」「昔は町内会の皆でお祭りや運動会を頻繁にやったが今は難しい状況」

「年寄りばかりが増えて若い人は皆出て行った」「独居老人が増えている」

「昔の古い一軒家があちこち空き地になっている」

- 町内会組織の衰退

「昔の町内会組織が成り立たなくなっている。いつも同じ顔ぶれ（昔からの顔なじみ）が会合に出てくるので盛り上がり欠ける。若い世代への組織拡張が課題」

「今も付き合っている人は自宅付近の数軒のお宅のみ。新しいマンションの住民とはほとんど付き合いはない」

「マンション住民は町内会活動に加わらない」

しかし一方で、特にここ 5～10 年くらいは若い世代の U ターン現象も起きていると聞く。就職や結婚などでいったんは親元を離れた子供世代が、年老いた親と同居する、または面倒を見るため一家で山鼻へ戻ってくる。さらには、「落ち着いたいい学校が多い」という文教地区としてのイメージは今日でも根強く、札幌市内の他区から一軒家やマンションを購入して引っ越してくる人々も少なくはないようである。

#### 4.2 調査対象者

先行研究（小野 1991, 1993）での話者の内訳（男女半数ずつ）は、以下のようになっている。どの話者も札幌市生え抜きとされる。

小学 5 年生 20 名、中学 2 年生 20 名、20 代 16 名、30 代 16 名、40 代 16 名、  
50 代 17 名、60 代 16 名、70 代 15 名、計 128 名（8 名欠席）

札幌市立柏中学校、札幌市立幌南小学校を会場に二日間にわたって、調査票を用いた面接調査が行われた（調査票は小野 1991, 41～59 頁に掲載）。調査票は、話者による読み上げを主体とし、単音節、単独文読み上げ、長文朗読などから構成されている。そのうち、1～4 拍名詞に関するアクセント型の分析結果が公表されている（小野 1993, 59～86 頁）。

先行研究から 20 年後となる本パネル調査では、1990 年当時の 60 歳代と 70 歳代の山鼻住民を除く 97 名を調査対象とした。（ただし、中学生 20 名については氏名のみでの把握のため、現在のところ搜索は難しい状況にある。）

2010 年 10 月より現在の 60 歳代（1990 年当時 40 歳代）と 70 歳代（1990 年当時 50 歳代）の話者 33 名を対象に第一次調査を開始。2011 年 3 月末現在で、60 歳代話者 9 名（男 4・女 5）、70 歳代話者 8 名（男 3・女 5）、合計 17 名の調査を完了した。33 名のその他の内訳として、辞退者が 8 名、転居者 4 名、未調査が 4 名となっている。

（また、1990 年当時の中学生[現在 30 代] 1 名、20 歳代話者[現在 40 代] 2 名からの調査も終了している。）

本発表では、調査が完了している 60～70 歳代話者 17 名中、10 名（男 5・女 5）についての分析結果を報告する。

#### 4.3 調査方法

先行研究（小野 1991, 1993）の調査票を中心に、各話者から面接による音声を収集させてもらった。ただし、母音発音項目など一部は割愛し、他の先行研究（国研 1965, 1997; 尾崎 1986, 1989）で調査された語彙も追加するなどして新たな調査票を作成した。

また、面接では、読み上げタスクによる音声収集の他に、20 年間での生活上の変化、山鼻地区の変化、方言・標準語意識、趣味や習い事、町内会活動などを含めた日常生活の様子など様々な話題を挙げ話をしてもらい、各話者の「日常語」にできるだけ近い語り音声の収集も併せて行った（Labov 2006）。

#### 4.4 分析結果

今回、分析対象としたのは、先行研究（小野 1993）で公表されているのと同じの名詞で、1 拍名詞が 15 項目、2 拍名詞が 60 項目、3 拍名詞が 46 項目、4 拍名詞が 25 項

目、合計 146 項目である。各拍名詞のアクセント型の内訳と代表例については表 1 にまとめた。

表 1 分析対象名詞 1～4 拍のアクセント類型（共通語型）と具体例

1 拍(15 項目)	I 類(○▼)	柄が・血が、など 5 項目
	II 類(○▼)	葉が・日が、など 3 項目
	III 類(●▼)	絵が・歯が、など 7 項目
2 拍(60 項目)	I 類(○●▼)	鼻が・飴を、など 12 項目
	II 類(○●▼)	橋が・紙を、など 12 項目
	III 類(○●▼)	花が・髪を、など 12 項目
	IV・V 類広(●○▼)	空が・船が・糸が、など 12 項目
	IV・V 類狭(●○▼)	箸が・松が、など 12 項目
3 拍(46 項目)	A 型 ○●●▼	机・背中、など 21 項目
	B 型 ○●●▼	毛抜き・力、など 7 項目
	C 型 ○●○▼	小麦・つつじ、など 3 項目
	D 型 ●○○▼	姿・命、など 15 項目
4 拍(25 項目)	○●●●▼	そろばん、など
	●○○○▼	挨拶、など
	○●○○▼	果物、など
	○●●○▼	大雨、など
	○●●●▼	弟、など

(小野 1993)

小野 (1993) と同様に、各話者の「共通語化」の度合いを点数制（ただし、本発表では得点割合）で測定した。共通語的アクセント型で発音された項目には 1 点、そうではない項目には 0 点、複数回発音された項目にはそれらの平均点を付けた。総点は 146 点 (100%) となる。当然のことながら、この 146 項目から各話者の持つ名詞アクセント体系の全容が明らかになるわけでは必ずしもないが、本調査の焦点は「個人語」の経年的変化にあることをここで改めて指摘しておく。

#### 4.4.1 拍数による経年比較

グラフ 1～5 では、各被験者ごとに、名詞の拍数による共通語的アクセントの産出の割合 (%) を 1990 年調査と本パネル調査 (2010 年) 間で比較した。総点欄には、各

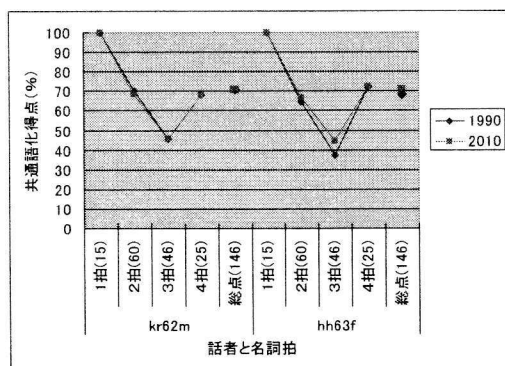
拍ごとの共通語化の割合を平均した数値を入れてある。各グラフには、同じ年齢層に属する男女をペア（男性左側、女性右側）で2名ずつ掲載してある。話者記号は、氏名のイニシャル・本調査時点での年齢・性別の順である（例 kr62m：話者 kr, 62歳男性）。

まず、総点だけに注目すると、すべての話者において名詞アクセント体系全般を揺るがすような顕著な生涯変化は観察されない。

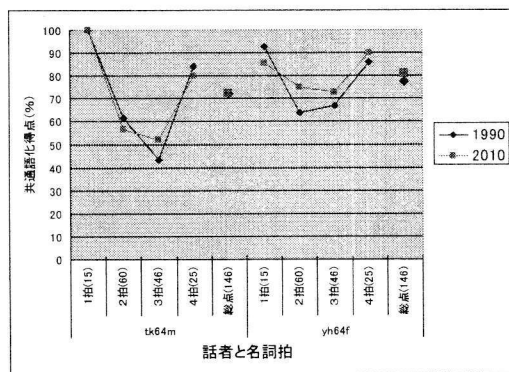
拍数ごとの経年的推移（折線）からも、男性話者5名中3名（グラフ1-kr62m, グラフ3-kk66m, グラフ5-st72m）、女性話者5名中2名（グラフ1-hh63f, グラフ4-hm74f）については、20年間でほとんど変化はしていないと言える。また、2名（グラフ1, 5）を除き、同じ世代でも概して女性の方が得点割合が高い。女性の強い威信形志向という男女差の典型的パターンと一致する（Trudgill 1972）。

また、単純に名詞の拍数に比例して共通語化の進度が鈍いというわけではなく、特に2拍・3拍名詞における進度の遅れが10名の被験者間で一貫したパターンだと言える。この点については、4拍名詞の語彙数[25項目]が他拍名詞に比べ少ないこと、5拍以上の名詞が未処理であることなどからさらなる検証が必要だと思われる。

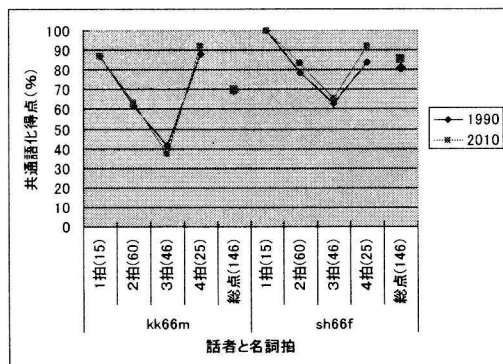
グラフ1: kr62歳男性, hh63歳女性



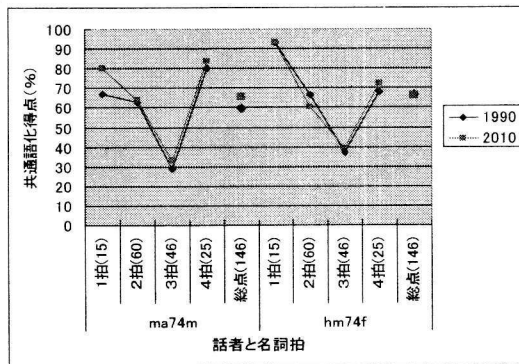
グラフ2: tk64歳男性, yh64歳女性



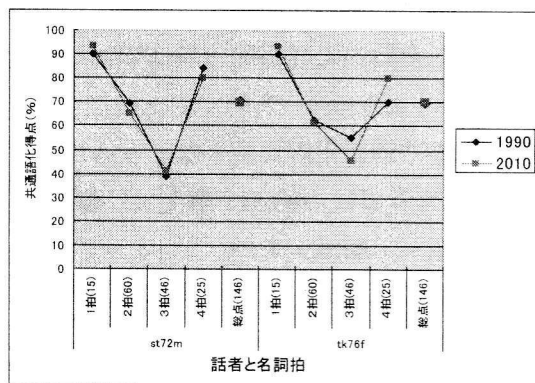
グラフ3: kk66歳男性, sh66歳女性



グラフ4: ma74歳男性, hm74歳女性



グラフ 5: st72 歳男性、tk76 歳女性



一方、名詞の拍数によっては、極めて小規模ながら「生涯変化」と思われる動きを示す話者が数名いる。しかし、これには必ずしも共通語化へ向けた変化ばかりではなく、共通語とは異方向への変化も含まれている。これも概して、男性話者よりも女性話者に多く見られる。次節以降は、名詞拍数ごとの個人語変化に着目して分析結果を論じる。

#### 4.4.2 1拍名詞における経年比較

先行研究（小野 1993）でも指摘されているように、1拍名詞アクセントでは、世代に関わりなく共通語化がかなり進行している。10名中1名（グラフ 4、ma74m）を除き、20年前ですでに8割を越える得点を示しており、その傾向は本パネル調査でも再確認できる。

もともとの分析対象項目数が15と少ないため、割合にすると経年的差異が大きく見えるが、グラフ上で比較的是っきりと差の確認できる話者が2名いる（ma74m, yh64f）。話者 ma（74歳男性、グラフ 4）については、I類（○▼）の2項目（血が出た、気が重い）において頭高だったアクセントが平板に、III類（●▽）の1項目（火が燃える）において平板だったアクセントが頭高に、それぞれ共通語化へ向けた変化を起こしている。しかし、II類（○▼）の1項目（葉が散る）については、20年前には共通語アクセントだったものが頭高に発音されるケースも見られた。

もう一方の話者 yh（64歳女性、グラフ 2）における経年的差異は、共通語化とは異なる推移によるものである。III類（●▽）の1項目（田を耕す）が平板に発音されている。



#### 4.4.3 2 拍名詞における経年比較

1 拍名詞とは異なり、2 拍名詞における共通語化の度合いは、1990 年の調査時点ではどの話者も共通して 60～70%程度と低かったことがグラフ 1～5 でわかる。20 年後の本パネル調査では、10 名中 1 名（グラフ 2: yh64f）を除いて経年的差異はほとんど見られない。

尾崎（1986）でも指摘されたように、札幌方言の共通語化の尺度となりうるのは、第 II 類（北海道方言的○●▼）名詞（橋が・紙を、など）の第 III 類化（○●▽）、第 IV・V 類広母音（北海道方言的○●▽）名詞（空が・船が・糸が、など）の同類狭母音（●○▽）名詞（箸が・松が、など）への合流の有無である（図 1）。

図 1 2 拍名詞における類別アクセント型： 札幌・東京

札幌 (=北奥)	第 I 類・第 II 類 /OO/		第 III 類・ 第 IV 類 <sub>N</sub> ・第 V 類 <sub>N</sub> /O <sup>1</sup> O/
			第 IV 類 <sub>W</sub> ・第 V 類 <sub>W</sub> /OO <sup>1</sup> /
東京	第 I 類 /OO/	第 II 類・第 III 類 /OO <sup>1</sup> /	第 IV 類・第 V 類 /O <sup>1</sup> O/

※Nは第2モーラが狭母音(i, u)、の語。Wは広母音(a, e, o)の語。

(尾崎 1986, 69 頁)

グラフ 6～10 は、2 拍名詞の類別に話者ごとの経年的差異を示す。ここでも総点欄には、各拍ごとの共通語化の割合を平均した数値を入れてある。(印刷上、グラフ内に 1 本線しか現れない部分があるが、これは 2 調査間で全く差異がなかったことを意味する。)

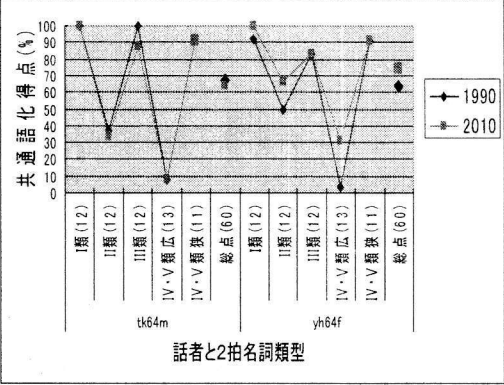
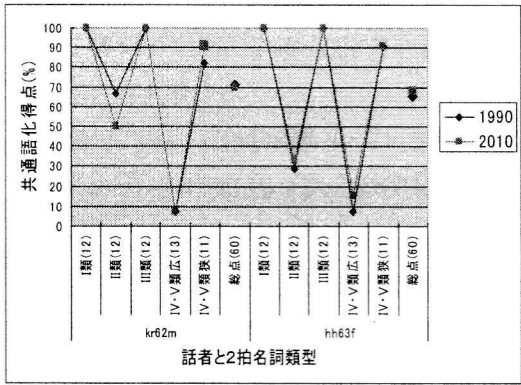
グラフから、共通語化が立ち遅れているのは、II 類名詞と IV・V 類広母音名詞であり、すべての話者に共有されたパターンであることがわかる。上記の予測(尾崎 1986)と一致する。生涯変化が起きているとすれば、その大半はこれら 2 グループに属する名詞に関わりがあり、共通語アクセントと一致する他の類(I・III 類)に関しては、すべての話者に共通して比較的安定しており、IV・V 狭母音名詞が追従するかたちをとる。

2 拍名詞の共通語化へ向けた個人語の変化は、上述の全体的傾向(グラフ 1～5)からも明らかなように、特に話者 yh (64 歳女性、グラフ 7)に顕著である。話者 sh (66

歳女性、グラフ 8) がそれに続く。話者 yh (64 歳女性) においては、II 類では「橋が」「夏が」「石が」(○●▼) が○●▽に変化、IV・V 類広母音項目では、「空が」「種が」「雨が」「蜘蛛が」(○●▽) などが●○▽に変化している。話者 sh (66 歳女性) においては、II 類では「橋が」「石が」、IV・V 類広母音項目では、「種が」「井戸を」が話者 yh と同様の变化パターンを示す。

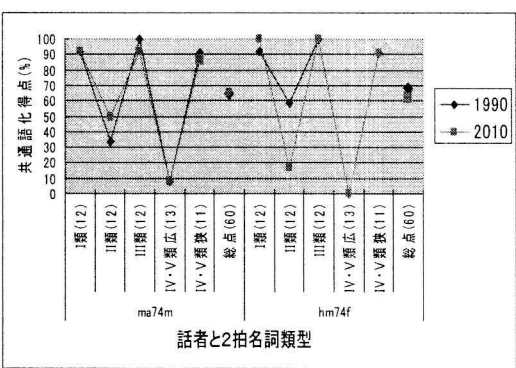
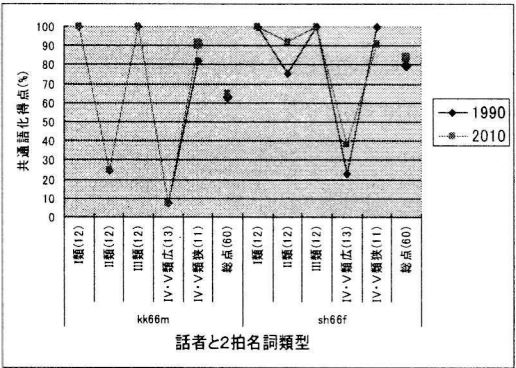
グラフ 6: kr62 歳男性, hh63 歳女性

グラフ 7: tk64 歳男性, yh64 歳女性

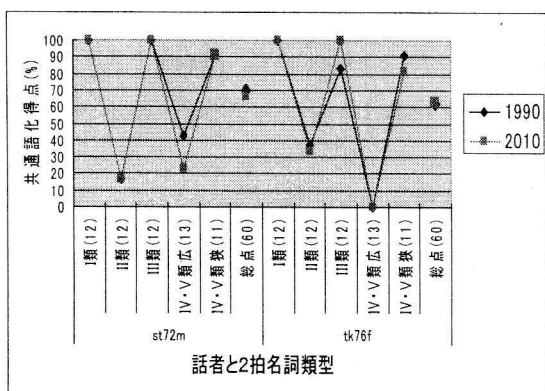


グラフ 8: kk66 歳男性, sh66 歳女性

グラフ 9: ma74 歳男性, hm74 歳女性

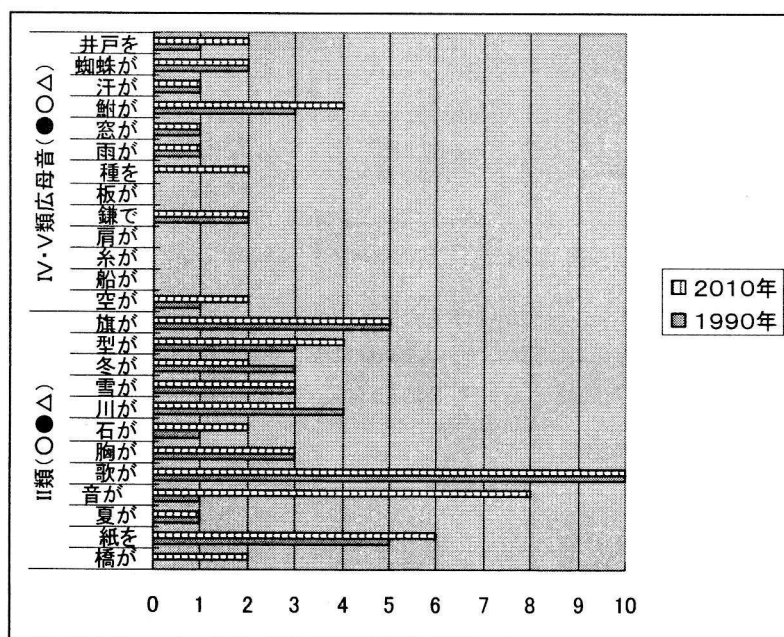


グラフ 10: st72 歳男性, tk76 歳女性



グラフ 11 は、本調査において II 類に属する名詞と IV・V 類広母音に属する名詞について共通語的に発音した話者の人数を示す。全員が発音していれば 10 となる。グラフから母音の種類など音声的制約から共通語的に発音される（されない）などといった規則性は読み取れない。そうだとすると、日常生活における当該名詞の使用頻度、日常性・親近感などといった非言語的要因により生涯変化が左右されるのか、あるいはなんら規則性を持たないランダムな事象とみなすべきなのか、さらなる検証が必要である。

グラフ 11 2 拍 II 類名詞・IV/V 類広母音名詞における共通語的アクセントの使用人数  
初回調査 (1990 年)・再調査 (2010 年)

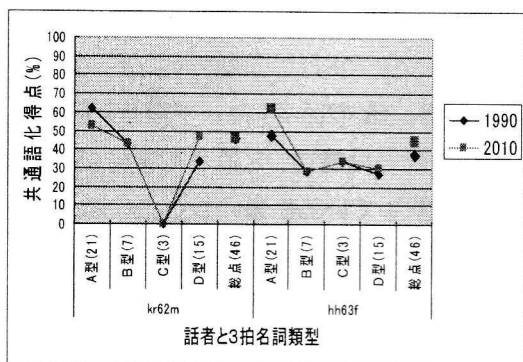


一方、グラフ 6～10 からは、共通語化とは逆行する経年的推移も観察される。最も顕著な差異は、話者 hm (74 歳女性、グラフ 9) の II 類で起きている。これは、「紙を」「夏が」「音が」「川が」「型が」など共通語的アクセントだったもの (○●▽) を、北海道方言的な平板式 (○●▼) に発音したためである。話者 kr (62 歳男性、グラフ 1) の II 類における割合の減少も同様の理由からである。最後に、話者 st (72 歳男性、グラフ 10) の IV・V 類広母音名詞における共通語化割合の減少については、1990 年調査時点で「種を」「雨が」「汗を」などに揺れが大きく、共通語的●○▽と北海道方言的○●▽の両方で複数回発音されていた。今回の調査では、どの名詞も一貫して後者で発音された。

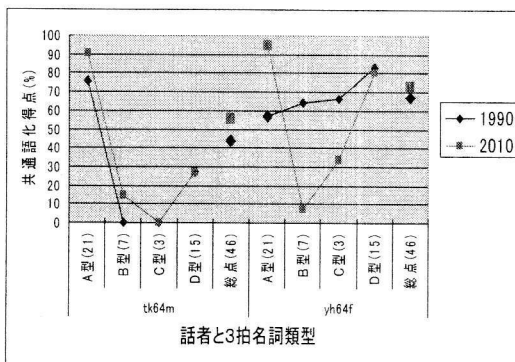
#### 4.4.4 3 拍名詞における経年比較

すべての話者に共通して、最も共通語化の遅れている 3 拍名詞 (グラフ 1～5 参照) は、グラフ 12～16 のようなアクセント型による変異を示す。前掲表 1 にならい、A 型 ○●●▼・B 型 ○●●▽・C 型 ○●○▽・D 型 ●○○▽の 4 分類で示す。アクセント型間の項目数が不均衡なため、総点欄では各型ごとの割合の平均値ではなく、総点 (46) に対する得点の割合を示した。

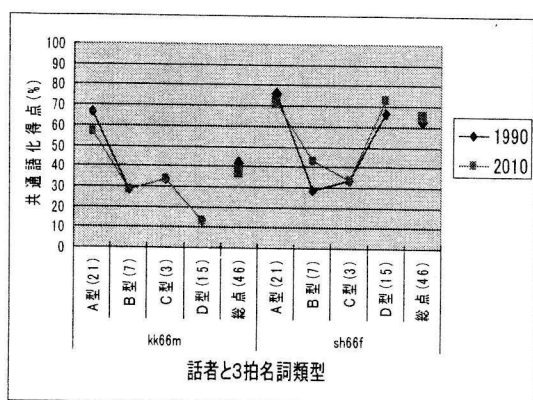
グラフ 12: kr62 歳男性, hh63 歳女性



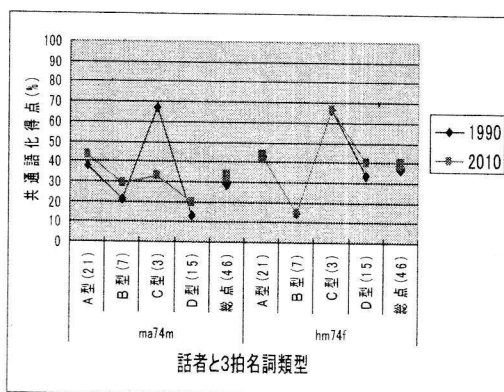
グラフ 13: tk64 歳男性, yh64 歳女性



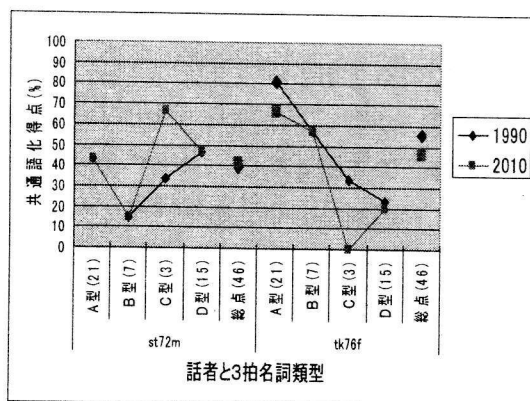
グラフ 14: kk66 歳男性, sh66 歳女性



グラフ 15: ma74 歳男性, hm74 歳女性



グラフ 16: st72 歳男性, tk76 歳女性



各グラフの総点のみに注目すると、これまでと同様、どの話者においても顕著な経年的変化は見られない。しかし、1拍・2拍名詞の場合とは違い、3拍名詞では個人差がより大きく、総点では35%~75%程度と広範囲に分散している。また、ここでも概してどちらの年齢層においても、女性が男性を共通語化で先導しているのがわかる。

アクセント型による分布（折線）に着目しても、10名の話者に共通する規則的パターンはグラフからは即座に読み取りづらい。これは各アクセント型に属する項目数の不均衡が原因の一つではあるだろう。B型7項目・C型3項目が他の型（A型21, B型15）と比べ極端に数が少ない。（さしあたってB型・C型を考慮からはずして曲線を眺めるとすれば、話者2名yh64f（グラフ13）、st72m（グラフ16）を除くほとんどの話者で、A型（○●●▼）がD型（●○○▽）を先導しているように見えなくはない。）

各項目を細かに見ていくと、共通語的ではないアクセントについて、どの話者にも共通したパターンが確認された。A型○●●▼（机・背中、など）・D型●○○▽（姿・



命、など) がともに C 型 (○●○▽) で発音されることが圧倒的に多い。B 型 ○●●▽ (毛抜き・力、など)、C 型 ○●○▽ (小麦・つつじ、など) は、項目数は少ないが、B 型については A 型と C 型が混在、C 型については A 型の平板式が圧倒的に多い。

個人語の経年的変化について総点のみから判断すれば、ほとんど変化なしが 10 名中 7 名 (男 4/女 3)、共通語化への微増が 2 名 (グラフ 12-hh63f、グラフ 13-tk64m)、逆に共通語化減退の傾向の見られる話者が 1 名 (グラフ 16-tk76f) となる。<sup>2</sup>

総点では顕れないが、特に顕著な共通語化への経年的変化は、話者 yh (64 歳女性、グラフ 13) における A 型 (○●●▽) の伸び率で、1990 年初回調査時には「背中が」「兎が」「菓を」「畑を」(○●○▽)・「後ろを」「着物を」(○●●▽)・「いちごが」(●○○▽) が、20 年後の今回調査では軒並み共通語的 (平板式) 発音 (A 型 ○●●▽) になっている。話者 hh (63 歳女性) と話者 tk (64 歳男性) では、他に「狐が」「いちごが」「鯨が」など (C 型 ○●○▽) が A 型へと変化した。

一方、共通語化への変化が顕著な話者 yh (64 歳女性、グラフ 13) は、項目数の少ない B 型・C 型において共通語とは異なる方向にもアクセントが変化している。同様の現象は、話者 tk (76 歳女性、グラフ 16) にも当てはまる。これはどちらの話者においても、B 型ないしは C 型のほとんどの項目を A 型 (平板的) で発音していることによる。

#### 4.4.5 4 拍名詞における経年比較

4 拍名詞の共通語化は、どの話者においても 70% 以上の比較的高い割合を示す (グラフ 1~5)。共通語的ではないアクセントで代表的な項目は、「オルガンを」「三日月が」(○●●●▽) がそれぞれ ●○○○▽・○●○○▽ に、「チャンネルを」(●○○○▽) が ○●●●▽ に、「すずらんが」「二次会が」(○●○○▽) が ●○○○▽ に、「大雨が」「小刀で」(○●●○▽) が ○●●●▽ などに発音されている。

数名の話者 (yh64f, sh66f, tk76f) において、2~3 項目程度、共通語へ向けた経年的変化が見られる。「オルガンを」「チャンネルを」「すずらんが」「大雨が」が主な項目である。

<sup>2</sup> 富良野市パネル調査 (国研 1997, 161~166 頁) によると、「主人」のアクセント (D 型) において、北海道方言的アクセント (○●○▽) から共通語的アクセント (●○○▽) への生涯変化を起こした話者は、世代にはそれほど関わりなく全体の約 6 割 (67 名中) とされる。一方、初回調査時 (1990 年) の中年層話者のみ 10 名を分析した本発表では、これまでのところ方言形から共通語形へ個人語の変化が見られた話者はいない。

#### 4.5 考察：生涯変化の社会的意味

60歳・70歳代話者のみを分析対象とした今回の第一次調査では、大多数の話者において「生涯変化」と言えるほどの経年的変化は確認できなかった。大多数の話者の個人語（ここでは名詞アクセント体系）は、20年の歳月を経てそれほど大きく様変わりはしていない。本調査に関する限り、「見かけ上の時間」解釈に基づく言語変化研究の妥当性や言語の諸領域で最も変わりにくいのは韻律面だとする一般化を支持する結果が得られたと言える。また、先行調査（尾崎 1986, 1989）で「共通語的アクセントと方言的アクセントが混在」する世代とされた本調査の被験者の大半は、20年後の今日でも、特に2拍・3拍名詞を中心にその特徴を保持していることもわかる。

一方、生涯変化か否かを判定する計量的基準を設定することは難しいが、個人語の経年的推移を眺めることで、明らかに上記の「主流派」とは異なり一貫して変化を示す話者もいた。特に注目すべきは、話者 yh（64歳女性、グラフ 2・7・13）である。前節 4.3 で述べたように、本研究プロジェクトでは、調査票による読み上げ音声の収集だけでなく、各話者から「日常語」に近い語り音声を収録させてもらっている。その際、どの話者に対しても一様に以下のような話題を投げかけ話してもらったが、過去 20 年における社会生活上の変化が、当事者の自覚の範囲内である程度は把握できた。

「前回調査（1990 年）以降、なにか大きく変わったことはありますか」

- ・ 住環境や街の様子
- ・ 家庭生活や社会生活（特に仕事面）
- ・ 趣味や習い事
- ・ 人付き合いや近所付き合い
- ・ 町内会での役割や町内会活動
- ・ ことば（自分のことば、他者のことば、札幌のことば、方言、標準語）への意識
- ・ 他方言との接触

話者 yh（64歳女性）の語りの中から、他の話者とは特に対照的な「話者特性」がいくつか挙げられる。その一つは、「家庭生活」における「他方言との接触」である。話者 yh の配偶者（4 年前に死去）は、横浜出身者で「綺麗なことば遣い」（本人談）をいつもしており、「自分も綺麗なことばを使いたい」という願望が常日頃あったという。そのせいか、自分のことば（札幌方言）は方言だという意識が強く、ことば遣いには

いつも気を付けていたという。一方、他の話者については、話者 ma74m と話者 tk76f は独身、その他は全員、既婚者（もしくは離婚経験者）で他方言を話す配偶者を持つ（持っていた）話者はいない。

上記と関連し、ことば遣い全般（自分のことば・他者のことば・方言・標準語）への意識や評価、感覚に関わる語りが能弁だったことも話者 yh の特筆すべき点である。配偶者の影響からか、標準語は（東京ではなく）横浜界限のことばだと明言した。（ただし、この言語意識については、東京もしくは関東圏のことばを標準語と捉える話者は他にもいるので、共通語化の個人差の意味を解釈する上で絶対的な指標になるとは言い難い面もある。）

話者 yh は、職業を中心とした社会生活の内容においても、とりわけ他の女性話者とは対照的である。高校卒業後、大手銀行の窓口業務に 15 年間携わり、33 歳で配偶者の転職を契機に飲食店を開業（12 年前に廃業）。過去 20 年間での生活上の大きな変化に関する問いに、飲食店開業と廃業を第一に挙げた。他の女性話者（4 名）については、専業主婦が 2 名（hh63f, hm74f）、前回調査（1990 年）時点でシングルマザーとして常に勤めに出ていた話者（銀行員の後、花屋店員）が 1 名（sh66f）、20 代から日本舞踊を教え、前回調査後まもなく喫茶店を開業した話者が 1 名（tk76f）という内訳である。なかでもこの後者 2 名は、話者 yh ほどの規模ではないが、個人語が共通語化または異方向（平板化）へ一貫した「揺れ」を示す話者でもある。話者 yh を含めこれらの話者には共通して、職業的ニーズから比較的広範なコミュニケーション網の中で様々なことばと接する機会が多かったという事実が指摘できる。

一方、今回の調査から個人語の経年的推移は、必ずしも共通語化へ向けたものばかりではないことも明らかになった。2 拍・3 拍名詞におけるアクセントの平板化志向がその例である。先行研究（小野 1993）によると、調査（1990 年）当時、特に 30 代以下（1950～1955 年以降の生まれ）を境に急速な東京語化、特に平板化が顕著とされている。今回の調査で特に平板化の目立つ話者については、若い世代との接触の頻度や濃度を中心としたさらに入念な話者特性の分析が求められる。

また、本調査では、中年から老年への加齢に伴う趣味（アウトドア派からインドア派へ）や社会生活上の変化（退職、配偶者の死去に伴う独居）、余暇を有意義に過ごすための習い事（麻雀、民謡、社交ダンスなど）への参与とそれに付随した地元住民主体の人脈形成など、大多数の話者に共通して見られる社会生活上の変化もあった。今回、大半の話者において確認された個人語の不変性は、現段階では推測の域を出ないが、山鼻地区の老齢化や（都会的）過疎化、町内会組織や活動の衰退に伴うコミュニケーション網の縮小化や単調化などといった生活環境上の変化とどのように関わるの

か、さらに系統だった分析が今後は必要とされる (cf., 池上他 1977, 北海道方言研究会 1978, Milroy 1980, Eckert 2000)。

## 5. おわりに

本発表では、2010 年秋から筆者が着手している札幌方言山鼻地区実時間研究より第一次調査の結果を報告した。札幌方言を対象とした先行研究 (尾崎 1986, 1989; 小野 1991, 1993) によれば、調査当時で 30 歳代 (現在、50 歳代) 話者を境に急速な東京語化の進行が確認されている。今回の調査で明らかになった老年層 (60・70 歳代) 話者の個人語の不変的特性については、共通語化への言語変化が急激に進んだとされる現在 50 歳代以下の世代を含めて今後さらに検証を続けるつもりである。この四半世紀で山鼻地区の札幌方言に何が起こったのか、その全体像を記述したいと考えている。

また、名詞アクセントのみならず、動詞・形容詞についても分析が必要とされる。特に形容詞アクセントの「一型化」傾向については追跡調査が強く望まれる (小野 1993)。

そして最後に、個々の話者の社会生活上の経年的推移 (変化) を「社会的変数」としてどのように表現し、観察される共通語化 (またはローカリズム化) における個人差の解釈にどのように役立てるかが、今後取り組むべき最重要課題だと考えている。

## 参考文献

池上二良・五十嵐三郎・柴田武・岡本次郎・小野米一・大山信義・井上史雄 (1977)『北海道浜ことばの共通語化に関する計量社会言語学的研究』科学研究費 総合研究

### A 研究成果報告書

石垣福雄 (1991)『北海道方言辞典』北海道新聞社

井上史雄 (編) (1983)『新方言と言葉の乱れに関する社会言語学的研究 ～東京・首都圏・山形・北海道～』科学研究費 総合研究 A 研究成果報告書

尾崎善光 (1986)「社会言語学的アプローチから見る札幌市のアクセントの変遷～名詞篇～」日本学報 第6号 67～110 頁

—— (1989)「社会言語学的アプローチから見る札幌市のアクセントの変遷～名詞篇(2)～」日本学報 第8号 1～32 頁

小野米一 (1981)「言語研究と北海道方言」『五十嵐三郎先生古稀記念祝賀論文集』北海道方言研究会、194～209 頁

—— (1988)「北海道における新方言事象」国語の研究 12

—— (1991)「札幌市方言多人数調査票について」『東日本の音声～調査票編～』日本語音声における韻律的特徴: 東日本における音声の収集と研究 (研究代表者 加藤正信) 41～59 頁

—— (1993)「札幌市方言多人数調査

資料について」『東日本の音声 論文篇(3) 主要都市多人数調査 (札幌市・名古屋市) 報告』研究成果報告書 (研究代表者 加藤正信) 51～86 頁

国立国語研究所 (1965)『共通語化の過程 ～北海道における親子三代のことば～』国立国語研究所報告書 27

—— (1997)『北海道における共通語化と言語生活の実態 (中間報告)』国立国語研究所

真田信治 (1987)「ことばの変化のダイナミズム ～関西圏における neo-dialect について」言語生活 42 9 号

真田信治 (編著) (1999)『展望 現代の方言』白帝社

—— (2000)『脱・標準語の時代』小学館文庫

北海道方言研究会 (1978)『共通語化の実態 ～北海道増毛町における 3 地点全数調査～』北海道方言研究会叢書 第1巻

ロング・ダニエル 中井精一 宮治弘明 (編) (2001)『応用社会言語学を学ぶ人のために』世界思想社

Chambers, J. K. (2009). *Sociolinguistic Theory (Revised Edition)*. Oxford: Wiley-Blackwell.

Chambers, J. K., & Trudgill, P. (1998). *Dialectology (Second Edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.



Eckert, Penelope. (2000). *Linguistic Variation as Social Practice*. Oxford: Blackwell.

Kerswill, P., & Williams, A. (2000). Creating a New Town koine: Children and language change in Milton Keynes. *Language in Society* 29: 65-115.

Labov, William. (2009). *The Social Stratification of English in New York City (Second Edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.

Milroy, Lesley. (1980). *Language and Social Networks*. Oxford: Blackwell.

Sankoff, G., & Blondeau, H. (2007). Language Change across the lifespan: /r/ in Montreal French. *Language* 83(3): 560-88.

Trudgill, Peter. (1972). Sex, covert prestige and linguistic change in urban British English. *Language in Society* 1: 179-19.